

それは肉マンではなくて

五月二三日（日）午前一〇時半頃。南寧から二〇時間半の列車の旅を終えて、ようやく貴陽站到着した。

不自由な姿勢で長時間列車に揺られていたこともあり、あまり眠れなかったこともあって、頭の中には白い霧がかかっていた。

貴陽には一泊して明日の列車で昆明に向かう予定だったので、まずは重たい荷物の中から必要な物だけをナップサックに取り分けて、残りは小件寄存処に預けた。身軽になつてから售票処へ。

南寧站ほどのことはないが、それでも售票処の中は列車の切符を求める人々で混雑していた。疲れていたし、これからすぐにはとても行列に並ぶ気力はなかつたので、さてどうしようかと、ぼんやりと視線を泳がせていた。時刻表で確かめた列車は、三二三次、貴陽発一九〇四二、昆明着八〇三三。南寧からの列車に比べると時間は短いけれども、一三時間弱。どうしても硬臥（寝台）が欲しかった。

さつきからしきりに何かを話しかけてくる女性がいた。聞くともないままに耳を傾けていると、どうやら代わつて切符を買ってくれるというのらしい。彼女にまかせて切符を買ってもらうということも考えられたのだけれども、南寧站の硬臥窓口のことを考えてみても、とても硬臥の切符は手に入れられそうには思えなかつた。それに寝不足の身には、彼女の接着剤のようなしつこい勧誘の口調はともつきあいきれないという気がした。

やはりここはちよつとぜいたくをしようかと、僕は思う。外国人の特権を使うことは気が引けたけれども、このままでは身がもたない。親切にもガイドブックには二階の軟席候車室で切符を買えばいいということが書いてあったので、それに従うことにした。

售票処脇の階段を上つて軟席候車室へ。一角に切符売場らしい窓口があったので、明日の切符が欲しいことを告げると、服務員の女性は明日の朝八時に来るようにと答える。ちよつと心配だったけれども、彼女の言葉に従うことにして、人気のない軟席候車室のソファで休憩した。

貴陽站の候車室を出て駅前広場を見渡すと、大きな円形の植え込みを中心にした駅前広場はとても広く、また駅舎は薄い橙色の立派な建築だ。貴陽は貴州省の省都なのだ。しかしながらその景観の立派さとは裏腹に、行き交う人影はまばら、駅前広場を発着する路線バスの姿も少ない。これまでの都会に比べると何かがらんとした印象のする駅前の情景なのだった。（地図を調べてみると、貴陽站は貴陽市の南のはずれに位置し、市街

地とはかなり離れている。そのような位置も関係しているのかもしれない。)。

広場の片隅に店を出していた屋台のような食堂で米線(ミーシェン)を食べた。一見ラーメンのようなスープなのが、麺は白い。うどんにしては麺は細くて、おまけに脆くてすぐに細かく切れてしまう。おそらく米粉でつくったラーメンなのだ。それでも昨夜の弁当以来何も食べていなかったのも、とてもおいしい。空っぽの胃袋に熱いスープがしみわたるようだった。

駅前から中心地の方へ北東に伸びる道は遵義路と名付けられた大通りだけれども、体育館などの大きな建物がたまにある以外は背の低い商店などの建物が並んでいるだけで、人通りもなくて寂しい感じだ。遵義路を五分ほど歩いて、大きな交差点を西へ、瑞金南路へと入っていく。しばらく行くと左手には南明河沿いの河濱公園があり、少しずつ都会の賑わいのようなものが漂い始める。

やがて銀行などの大きな建築が続くようになり、ふと歩道の掲示板を見ると、それはただれた性器の写真だった。それは日本でも薬局の前によく張り出されている水虫の患部のような写真なのだが、そのものズバリ男と女のしかも性病にただれた性器なのだった。性病撲滅運動の一環でもあるのだろうか。ポルノ御法度のこの国で一方ではこのような露骨な宣伝はいかにも中国的共産主義的だという感じがしたのだった。

瑞金南路を五分ほど歩いたところによりやく金橋飯店を発見。それはガイドブックに安ホテルとして紹介されていたホテルなのだけれども、その外観は年月に風化したようないかにも年代物のホテルで、大通りを隔てて目にしたときには、果たして営業しているのかどうかも明らかではないように思われた。それでもフロントで服務員に尋ねてみると、シングルは一泊一〇元。あわてて、

「多人房、没有吗？(ドミトリーはありませんか)」

と尋ねると、簡単に一泊二五元の五人部屋に入ることができた。

チェックインの伝票を切りながら、服務員の女性は、

「日本人がいるよ」

と言葉を投げかけた。

四階まで階段を上って部屋の扉を押し開けると、髭面の男がいた。昆明からここへ来たのだと言う。すでに数日になるらしい。少し挨拶の言葉を交わしたあと、僕はすぐにベッドに横たわり、眠り込んでしまった。

一時間ほど眠って目覚めたとき、同室者はいなかった。がらんとしたホテルの一室でベッドに腰を下ろして、お茶を飲みながら、煙草を一服。

「さて、これからどうしようか」

予定の列車は明日の夜八時前の発なので、貴陽市の見学は明日にして、今日はちよつと郊外に足をのびしてみようか、と思う。

調べてみると、貴陽市の南一七キロほどのところに花溪（ホアシー）という街があり、花溪公園というのがあるので、そこへ行ってみることにした。

金橋飯店を出るとすぐに南明河の支流があり、その脇に今にも崩れそうな古い建物があった。それは木造三階建て瓦屋根の大きな民家だったが、この地方の伝統的な建築のようだった。既に壁は剥げ落ち、瓦は所々欠けていた。今にも崩れそうな伝統の背後には、開店されたばかりの百貨大樓の真新しいビルと開店を祝うアドバルーンが曇り空に浮かんでいた。百貨大樓前の陸橋には南寧よりもさらに零細な路上商人たちが店を出していた。陸橋に敷いたビニールシートにはバンドが数本、あるいは何種類かのプラスチックの櫛や洗濯ばさみ、あるいは爪切り、あるいはある男の前には爪楊枝だけ。おそらくなげなしの金をはたいて仕入れた商品なのだろうけれども、果たして生活が成り立っているのだろうかと心配になるほどだ。

陸橋脇のバス停からバスに乗って河濱公園へ（三角）。そこからミニバスに乗って（二元）、花溪までは三〇分ほど。途中、車窓から眺めた景色はすごく良かった。山がちの風景の中に、ときおり田園が広がって、田園には牛を扱う農夫の姿があった。田園の向こうには桂林の山水を思わせるような山がよつきりとそびえていた。しばらく眺めていた景色だったけれども、ミニバスはどんどん飛ばし、やがて花溪着。ミニバスを降りたところがちょうど花溪公園の入口だったので、そのまま入園（一元）。

花溪公園は貴陽市中を流れる南明河の支流、花溪河沿いに造園された公園。公園大門を入っていくと、木立の間を通り抜けていく小道のあちらこちらには写真屋さん。それにジュースや何かの食べ物露店。日曜日なのにと言うべきか、日曜日だからと言うべきか、まばらな人影がゆつたりと憩っていた。花溪河の静かな流れの所々には小さな滝が白い飛沫を上げていた。流れにほつかりと浮かんだ手こぎボート。川を横切る石橋の所では子供たちがずぶ濡れになりながら歓声を上げていた。川縁に腰を下ろして、せせらぎを眺めながら煙草を一服。

少し腹が減ってきたので、たまたま目についた何かの食べ物の屋台に腰を下ろした。調理台には直径五〇センチくらい高さが二〇センチくらいの半透明の白い寒天状のものが乗せてあった。おそらくそれを細長く切ってトコロテン状にしたものだろう、花溪流トコロテンをおわんに入れて、上からしょうゆ味の汁をかけて、五角。さらにその上に一塊の中華

ソバに乗せたものは、一元。少しでも腹の足しになるようにと高い方を注文した。

ひと口。まずい！と断定するのは気がひけるが、決してうまいものではない。ふと、火を通していない生ものはまずいかなと、疑問が頭を過ぎった。ふた口。決してうまいものではないが、食べて食べられないものでもない。もうひと口。これはこれでこういう食べ物なのだと、僕は納得しながら食べていた。

花溪河対岸の公園出口を出ると、小道沿いに食べ物や果物の露店がいくつか並んで、ちよつとした賑わいをつくっていた。奇妙なときめきを感じながら、人々の間を歩いていった。ふと、腹がコロコロと鳴り、いやな感じ。

バス道へ出る手前で裏通りの路地を入っていった。『花閣路』という道標が出ていた。しばらく行くと、路地は広場のような所に出て、前方にはビーチパラソルのような大きな白い傘がひしめいている。最初は何だか分からなかったのだけれども、近づいてみると、縫製屋さんたちなのだった。広場の路上にミシンを並べて、仕事をしている。旧式の黒い足踏みミシン。縫製屋さんたちの一角を通り抜けると、果物や野菜の露店。食べ物物の屋台。そして、日用雑貨。太い丸太を輪切りにしたようなごついまな板(?)、大小様々な石造りのつぼ、いろいろな形の竹籠、などなど。この付近に多く住んでいるという布依族の日用品だろうか。これまでの街では見かけなかった独特の日用雑貨が裏通りの広場や路地の両側、所狭しと並べられていた。道行く人の多くは顔色が浅黒く、明らかに漢族とは異なる顔立ちをしているのだけれども、民族衣裳を着ているわけではなくて、むしろ人民服。青色や草色の人民服を着ている人が多い。

(ちなみに貴州省の地図を見ると、貴陽市はそのほぼ中央に位置し、花溪はそのすぐ南。貴州省の南部、南西部は布依族苗族自治州、南東部は苗族侗族自治州となっている。)

日曜日のような裏通り(実は花溪一の繁華街)の賑わいをゆつくりと通り抜ける頃には、少しヤバかった腹の具合もいつのまにか治まっていた。バス通りに出て、歩道を花溪大橋(貴陽からのミニバスを降りたところ)の方へ歩いていった。繁華街からバス通りを隔てた反対側は田圃が広がっていた。バス通りを離れて、農道をしばらく歩いた。農道は田圃と田圃の間をくねりながらどこまでも続き、その向こうには低い山並が横たわっていた。花溪河の方を眺めると、赤煉瓦に黒い瓦屋根の家々が風景の一角に身を寄せあっているようだった。

再び花溪大橋の付近からミニバスに乗って貴陽へと戻る。ミニバスはどンドンと飛ばし、約三〇分で貴陽到着。と言いたいところだが、途中、

道端にバスは停車し、運転手はポリ容器を持ってどこかに消えた。しばらくして戻ってきたかと思うと、ラジエターに水を注ぎ足すのだった。貴陽市街に入っても降りるきっかけがないまま（見覚えのある場所で降りようと思っていたのだけれども）、終点、大什字（ターシーツ）到着。田舎の街から突然見知らぬ都会へと放り出されたかのような心境だった。

あわてて地図を調べただけでも、すぐに大什字を納得。中山路と中華路の交差点、貴陽市の中心なのだ。（大什字というのは大きな十字路という意味なのだろう。）現在位置はそこから少し西へ入ったところ、中山西路。そこから西の方に歩いていくと、すぐに大西門があり、金橋飯店はそのすぐ近く。迷わず僕は反対方向に歩き始めた。街にはすでに夕暮れが兆していた。歩道には所々にジュースやアイスなどの露店が出ていた。食べ物や屋台には人が集まっていた。少し散歩をしたあと、どこか適当な所で夕食をとろうと考えながら、僕は歩いた。

大什字には堂々たる百貨大木の建物がそびえて、買物客や遊びの若い人たちが賑わっていた。その前広場ではマイクスタンドや音響装置がセツトされて、どうやら何かの出し物が行われるらしい。広場を囲うようにして眺める見物人たちにまぎれてしばらく見ていたのだけれども、どうやら音響装置の調子が悪いようで、出し物は取り止め。主催者は装置の片付けを始めた。それを見て、期待とともに見物人たちの輪もほどける。

大什字を北へ。中華中路は貴陽一の繁華街。百貨大木を始めとして、衣料品、雑貨、食料品などの店や、食堂などが軒を並べ、人々で購わっていた。それでも都会の繁華街というよりも下町の商店街とでもいう印象だ。やがて中華中路は延安路と交差し、大きなロータリーになっている。繁華街はほぼそこで終わり。

ロータリー付近の屋台で沙鍋飯（一元）というものを食べた。コンロに並べられた小さなお釜のような土瓶の中にはごはん、その上に玉ねぎとサラミ風の肉が乗せてある。つまみに生キュウリの皿（一元）も注文した。晩飯には少し物足りなかったけれども、うまかった。

裏通りをたどって金橋飯店へ戻ろうとしたが、あえなく挫折。大通りから一步裏通りへ足を踏み入れると、すでにそこには都会の面影はなく、薄暗い通りの両側にはくすんだような街並が続くだけ。人通りの少ない裏通りは曲がりくねって、すぐに方向を失ってしまう。ぐるっとひとまわりして、ふと気がつくとき、さっきの屋台だった。あきらめて大通りを歩くことにした。

延安中路を西の方に歩いて、瑞金路との交差点を南下。大西門を越えるとすぐに金橋飯店。ビールと煙草、それに夕食が物足りなかったので果物

でも仕入れようと思って、ホテルの付近をうろついた。

たまたま市場になっている路地を見つけたので入っていった。しかしすでに閉店の時間を過ぎたらしくて、ほとんどの店はすでにかたづけられて、売り台は空っぽでシートなどで被われている。たまに開いている店はバッグや衣料の店だけ。それでもとぼとぼと市場の路地を歩いていると、向こうからもうもうと土煙が攻めてきた。大きな箒を手にした男たちが路地の向う側からこちら側に向けて路地を掃いてくるのだった。明かりの乏しい夕暮れの路地を、男たちは大きな箒で土煙を上げながら近づいてくる。あわてて、逃げた。

市場入口の商店で煙草とビールを買い、露店で肉マンとサンダルを買って、ホテルへと戻った。

髭面の日本人と少し話をした。F E Cと人民幣の交換レートの話になり、彼は、昆明では一〇〇元(F E C)に対して一七〇元〜一八〇元だと言う。それを聞いて、僕は内心穏やかではなかった。今までの一二〇〜一三〇元の交換はいったい何だったのか、と。

それでも平静を装いながら、さっき買った肉マンをひと口。

「ゲッ！」

それは肉マンではなくて、砂糖マンなのだった。思いがけないカウンタ―をくらって、あえなく僕は沈没する。

*

翌日、午前七時過ぎに起きて、火車站へ。軟席候車室の服務員に八時に来るようにと言われていたので、それに従ったのだ。

昆明行き、三三三次の硬臥のチケットを、と服務員に告げると、チケットは簡単に手に入れることができた。F E C一一三元。(もちろん外国人料金で、二〇元の手数料も含まれている。)

なにはともあれ、今夜の列車のチケットも手に入れて、ほっとひと息。朝食に昨日と同じ米線を食べた。

それから一路の路線バスに乗って黔靈公園へ。黔靈公園は貴陽北西部に広がる大きな公園で、黔靈山などいくつかの山から成る。

バス停を降りて、公園大門へと続く参道のような舗道を歩いていると、いろいろな食べ物やお土産物の屋台が軒を並べていた。まだ朝早い時間だったので、ただ今準備中といった様子だった。

チケットを買って大門を抜けると、野外老人デイスコだった。広場では二、三〇人の老人たちがラジカセの軽音楽に合わせて踊っていた。デイス

コでフィーバーというよりも、ちょっと軽快なラジオ体操という感じだったけれども。

大きな池に沿った公園の散歩道をたどっていると、木立の陰やちょっとしたスペースで大極拳をする人たちの姿が見られた。朝の公園を散歩するということがなかったからかもしれないが、初めて目にする大極拳をする人たちの姿に、立ち止まって僕はしばらく見とれた。中国へ来た以上、やはりひと目は見ておかなければならない情景のように感じていたのだろう。

遠足か野外実習らしい小学生の団体に混じって、山道を登っていった。ときどき猿が山道を横切り、木から木へと飛び移った。途中、小学生たちは山道を農園の方に折れ、子供たちの歓声は遠ざかって、誰もいない山道に、ひとり。

煙草を吸いながら、しばらくぼんやりとした。

チェックアウトの時間があつたのでいったんホテルへと戻り、再び黔靈公園へ。同じ公園に戻ってくるというのも芸がないように感じたのだけれども、ここしばらくの旅の緊張のためか、あるいは長時間の移動の疲れのためか、僕はとても憩いというものを求めていた。黔靈公園でゆったりと憩う人々の様子や公園のたたずまいは、僕にはなにかほっとするようなくつろぎを与えてくれた。

お昼近い時間になっていたので、公園前の舗道は人通りも増えて賑わっていた。食べ物の屋台のいくつかは昨日花溪公園で食べたトコロテンのような食べ物だった。どうやら貴陽でもポピュラーな食べ物らしい。腹具合が悪くなったことを思い出して、それを食べるのは止めにして、餃子を食べた。せいろで蒸した餃子。

黔靈公園に入園し、朝とは違う道をたどる。山頂近くの禅寺、弘福寺の境内を通り抜け、見晴らしのよい山頂を求めて細い山道をウロウロ、ウロウロ。山頂は分からず、適当な木陰に腰を下ろして煙草を一服。それから山の中のメインストリートとでもいう感じの山道を、たまに通るかかると観光客に従うようにしてたどっていった。途中、休憩所でジュースを飲んでひと休みし、再び歩く。いったいどこに行く道なのだろうかと、不安にさいなまれながら歩き続けていると、思いがけなくも朝歩いた大きな池沿いの道に出た。ぐるっと黔靈山の裏側をひとまわりしたのだった。

ちょうど目についた麒麟洞の石階段を上っていく。入口の門でチケットを買って入っていくと、庭の一角にポツカリと洞窟が口を開けていた。洞窟の内部は暗くてよくは分からなかったが、そこは国共内戦期に張学良、楊虎城両将軍が囚われた所なのだという。麒麟洞前の建物には当時の

写真や資料などが展示されていた。公園や山の中では穏やかに流れていた時間が、歴史的な写真の前では凝集し、緊張し、沈黙する。時間は決して均一に流れるものではないのだ。ひととおりに見終わって外に出ると、庭では職員の女性たちが麻雀をしていた。

公園は決して賑やかというほど人がいるわけではないが、かといって物寂しい感じがするほど人気がないということもない。ゆつくりとくつろぐのにはちょうど良いくらいの人出だ。

駱駝をかたわらにした写真屋が女性客に声をかけている。駱駝にまたがったところを記念写真に撮るのだ。女性客は誘われて一、二度駱駝に近づこうとするが、やはり怖くて尻込みするのだった。

路線バスで昨日の大什字の南、郵電大樓まで行って、そこから南明河にある甲秀楼に向かって歩いた。甲秀というのは科挙にひいでるという意味で、南明河の北岸から河に突き出すようにして建てられている。その独特の風貌はずいぶん遠くからもそれと認められた。

南明河沿いを、堤防下、河沿いの散歩道を歩いていった。所々に青い人民服を着た老人たちが何をするとということもなく憩い、河沿いの麻雀屋にも老人たちが集まっていた。人民服を着た男が長い棒を手繰って、河の藻や水草を集めて、河を掃除していた。公衆便所の前には退屈そうな管理人。

暑かったので、甲秀楼の付近でアイスを買って、食べながら甲秀楼に向かって橋を渡る。外観を眺めただけで十分だと思っただけで、そのまま前を通り過ぎて南明河を南岸へと渡った。甲秀楼の脇にも麻雀屋があり、麻雀牌をかき混ぜる乾いた音が鳴っていた。

ちよつと疲れたのでコンクリートの堤防に腰を下ろしてひと休み。付近に小学校があるらしくて、三々五々下校する小学生の姿が目を通り過ぎていく。その服装はそれぞれだけれども、皆一様に首に赤いスカーフを巻いていた。何故かは分からないけれども、そのスカーフがとても気持ちのよい感じで、しばらく僕は子供たちの姿に見とれていたのだった。子供たち相手に駄菓子を売るおばさん。

いつかこんな光景の中にいたような気がする。はるか昔のこと。そのとき小学生だった僕はもちろん赤いスカーフを首に巻いていたわけではなけれども、心の中にはそれと同じものを持っていたような気がする。それをひと言では言い表わすことはできないけれども、何か、民族を越えて通じあう何かを僕は感じていた。

下校途中の小学生たちの姿を眺めながら、僕は自分自身の記憶をさぐり、ある痛切な喪失感を味わっていた。それはおそらく毎日の暮らし、成

長の中で、少しずつ目には見えなくらいの速度で挫折していったものだ。旅の途上の見知らぬ街角で、思いもかけず僕はその喪失してしまったものを見せつけられたような気がしてうろたえる。強烈な郷愁の磁場に引き寄せられて、しばらく身動きがとれないのだった。

路線バスに乗って、大什字へ。繁華街を行ったり来たりして、お土産のお茶を物色した。お土産を考えるのは面倒なので、貴陽と昆明でお茶を買い込んで、先に日本へ送ってしまおうと思ったのだ。

繁華街のお茶屋さんを覗いたりしたけれども、結局品数が多そうだったので百貨大店で適当に何種類かのお茶を買い込んだ。

それから火車站へと戻り、列車に乗る前に売店でネーブル五個（計り売りで二・一元）を買った。

貴陽発は一九・四二。硬臥は三段ベッドが向かいあってひとつの区画をつくっている。僕のベッドは中段。硬座の旅に比べると天国だ。車内販売の弁当を食べて、あとは寝るだけ。昆明到着は明日の朝八・三三の予定。